

『薄暑便り』 ～教育は人なり～

後志教育研修センター
所長 長谷川 誠



新年度がスタートして2カ月が経過しようとしています。新型コロナウイルス感染症防止対策として、緊急事態宣言が延長されました。学校現場では毎日が少しも気を抜くことのできない状況にあるのかと推察致します。

今年度の当センターの体制は、新しく中村寿樹事務部長が就任されました。前部長同様よろしくお願い致します。また、今年度の4月当初の研修講座の申込受講者は例年より100名ほど多い先生方が申込をされており、600名に迫ろうとしています。講座担当の太田先生もうれしい悲鳴をあげて、追加受講決定通知を作成しています。管内の先生方の研修に対する真摯な姿勢に、心より敬意を表したいと思います。

さて、「教育は人なり」という言葉はいったい誰が最初に発したものののでしょうか。私たちはよくこの言葉を使います。特に、若い教職員を前にして使用することが多い様な気がします。そして、この言葉については様々なとらえ方があります。

教育は、優れた人格と熱意と気魄溢れる、実践的な教師によってのみ、その成果をあげることができるものである。
(元県立高校長の言葉)

「教育は人なり」という言葉があります。この言葉が示すように、教育は教師の力量に左右されます。勇気を持って言えば、教育は教師力によって決まります。これからは一人ひとりの個性や専門性を生かした魅力ある教師が求められます。それと同時に、教師集団が組織として機能し、学校力の向上を図ることも求められます。

(学びの森より)

「教育は人なり」とよく言われます。至極簡単に言えば、「教育に最も大切なのは人間性であり、人と人とのよりよい関係（信頼関係）をつくることのできるかによって、その成否はかかっている。」という意味です。
(県教育事務所便りから)

「教育は人なり」といわれるように、学校教育の成否は、教員の資質能力に負うところが極めて大きいと言えます。特に、学校教育を巡る様々な課題への対応のために、優れた資質能力を備えた魅力ある教員が必要とされています。

(文部科学省「教員をめざそう!」より)

これからは認知的スキル領域でAIに攻められるという状況でしょうが、人だからできること、人と人をつなげる、相手を見ての教え方、感動を与える、ほめるなど感性が大切ではないかと思うしだいです。
(県総合教育センターだよりから)

そこで、国立国会図書館のレファレンス協同データベースで語源・語義を探ってみると、回答は「該当資料は見つからない」ということでありました。

コロナ禍における令和時代の学校教育は、ICTが学びの一つの手段としてよりウエイトを占めてくるのは確実であります。しかしながら、どんなに科学技術が進歩しても、教育という営みが、人間が人間をより良い人間に育てていく営みである限り、教育する人間の人の柄や能力・態度が教育をうける者に影響してくるのは否定できません。それは、教師の生き方そのものが子どもにとって鏡になるからです。・・・私はこのように考えます。

以前、センター便りとして以下のような文章を載せたことがあります。

『子どもの心の扉は内側に鍵がある』これは、研修講座の閉講式の挨拶の中で、述べた言葉です。実はこの言葉は、私が学級担任を持っていた頃にとっても大切にしていたものです。教職について間もない頃、ある研修会でこの言葉に初めて出合いました。そして、画用紙に書きとめ、自分が担当する研修会や講座で紹介してきました。

それから、十数年経過して、この言葉が北海道家庭学校の校長であった谷 昌恒先生が言われた言葉であることがわかったのです。『教育力の原点～家庭学校と少年たち～』の本の中に収められている言葉です。この言葉に再び出合った時は、「ああ、この人の言葉だったんだ・・・」、心が震えました。

谷 昌恒先生は、本の中でこのように綴っています。

**心の扉には取っ手は内側にしか付いていません。
外側には取っ手がありません。
私たちは切に子どもの心を知りたいと願っています。
心の扉の外側に取っ手があれば、君はどんなことを考えているの、
さあ、あなたはどうか、などと言いながら、
さっさとその取っ手を手にとって、
相手の心の中をのぞき見ることができるでしょう。
しかし、それができないのです。
外側に取っ手がありませんからです。**

当時は大変過酷な環境の中で、「自然の力だけが少年たちを更生させる」という創立者の留岡幸助校長の考えで、この地に家庭学校が建ったものだと思います。しかし、家庭学校に来た少年たちは「なんで大人達は、俺をここに送ったんだ！」という気持ちしか持てなかったことと思います。他人に言えないような、様々な悩みを抱えて家庭学校にきた少年たちは、そう簡単に心を開くはずがありません。そのようなぎりぎりの状況の中で、谷 昌恒先生はこの言葉を発したのだと思います。

どうしたら、子どもが心を開くようになるのか。それは小手先だけの技術という表面づらのことではなく、私達大人の人間としての生き方が問われていることだと思うのです。大人がまず最初に、自分をさらけ出して、やっと初めて子どもも心を開くのだと思います。

私達が表面は笑顔を装っていても、少しでも「この子は・・・」と心の中で思っていたら、子どもの動物的な嗅覚が、私達の誤魔化しを一瞬で見抜いてしまいます。上っ面だけの優しさは、子どもの心には届かないです。

学校教育の根底は「流行」にあるのではなく、「不易」にあると考えます。「教育は人なり」は不易の大切な一つであります。私達は今一度、原点に立ち返り、「教育は人なり」の言葉をしっかりとかみしめたいと思います。